南沙諸島海域におけるサマの漁業活動
干魚と干ナマコの加工・流通をめぐって

Sama Fishery in the Spratly Islands:
With Special Reference to Dried Fish and Trepang Industry in the Philippines

赤嶺　淳*
AKAMINE Jun

キーワード：サマ，マンシ島，南沙諸島，干魚，干ナマコ
KEY WORDS: Sama, Mangsee, Spratly Islands, dried fish, trepang

This paper describes fishing practices and trade by the Sama in the Spratly Islands. Sama are also known as Bajau or Bajo as ethnonym and are usually considered to be nomadic people. Since the Sama are widely scattered through the eastern part of Southeast Asia, it is natural that they have developed various cultural and ethnic diversity.

Most Sama in the Philippines live in the Sulu Archipelago. There exist, however, a number of Sama in the Balabac area, at the southernmost end of Palawan Island. The Sama community at Mangsee Island in Balabac emerged during a national crisis in the Philippines, the declaration of the Martial Law by the late President Marcos in 1972. Most members of the community are refugees from Ungus Matata village, Tandubas Island, in Tawi-Tawi Province.

Today most adult men among the Mangsee Sama engage in either fishing with explosives or trepang gathering in the Spratly Islands of the South China Sea. Some thirteen to fifteen fishermen fish together for one to two months. Caught fish are dried and reach all of Mindanao through the Zamboanga market. Dried trepang are sent to Manila and redistributed to Chinese markets in as Hong Kong, Singapore, Taipei, and elsewhere.

My central claim is that the fishing activities at Mangsee are connected with two different trading networks: domestic or regional for dried fish and international for trepang. These networks have some similarities but differ in profit distribution and fleet organization. One important difference is that Chinese investors at Zamboanga finance explosive-fishing. It is now leading to changes in social organization among the Sama of the Mangsee Island.

*地域研究企画交流センター日本学術振興会特別研究員　JSPS Research Fellow, JCAS

はじめに：先行研究と問題の所在

フィリピン南西部のスル（Sulu）諸島からボルネオ島東岸，東部インドネシアにまたがる海域に，サマ（Sama）と自称する人々が生活している。他称としてバジャウ（Bajau）あるいはバジョ（Bajo）としても知られるサマは，一般的には家船に居住し，漁場を移動しながら漁撈生活を営む「漂海民」と考えられていることが多い［Sopher 1965］*1。スル海域を中心に移動を繰り返してきたサマは，1960年代以降のマレーシアのサバ州における森林開発にともなう好景気や1970年代以降のフィリピン南西部におけるモロ民族解放戦線とフィリピン国軍との内戦状態のなかで，サバ州やパラワン島南西部の島嶼部にも移動し，新しい居住地域を形成した。

本稿は，パラワン島南西部のバラバク（Balabac）町，なかでもマンシ（Mangsee）島におけるサマの漁撈活動と海産物加工・流通に関する覚え書きである。これまで「漂海民」と性格づけられてきたサマが，今日のフィリピン共和国における政治経済状況にどのように適応し，生計の道を探っているのか，をかれらの生業ともいうべき漁業形態を軸に考察することが本稿の目的である。なお本稿は1997年7月に，バラバク島およびマンシ島で3週間実施した予備調査*2にもとづくものであり，将来にわたっておこなう本格的調査研究の一部をなすものである。

本論に入るまえに，先行研究とわたしの関心について若干触れておきたい。

サマの漁業活動に関しては，すでにいくつかの研究がある。その視点のひとつは18世紀半ばから19世紀末にかけてホロ（Jolo）島を中心に繁栄したスル王国経済の要となった交易用海産物の採取に注目するものである。

スル王国はタウスグ（Tausug）の王族を頂点に，サマやそのほかの周辺民族をしたがえて成立していた。隆盛時のスル王国の勢力は，パラワン島，ボルネオ島北東部，ミンダナオ島南西部にまで及んでいた。歴史家のウォレンはこの海域をスル圏（Sulu Zone）と呼んだ［Warren 1981: xxi］（図1参照）。

スル王国経済は圏外との交易に依存していた。圏内に産出するナマコやシロチョウガイ，フカヒレなどの海産物とボルネオ島

＊1　スル諸島では船上生活の歴史が明らかではなく，定住的に浜辺・陸地に居住するサマも少なくない。船上生活の歴史が明らかなサマとそうではないサマに対して，スル諸島では前者をバッジャウ（Badjaw），後者をサマル（Samal）と呼び分け，前者を祖先霊崇拝の土着信仰を持つ集団，後者をイスラームに帰依した集団と説明することがある［Stone 1962］。しかし，両者の言語にみられる差異は同一言語の方言にすぎない［Akamine 1997］し，生活形態と生業による両者の区別は必ずしも明確であるとはいえない［床呂 1996: 161］。本稿では両者を「サマ」に包括し，必要に応じて出身島ないしはサマ自らが出自の本拠地とみなす村の地名でシタンカイ・サマ（Sitangkay Sama），シムヌル・サマ（Simunul Sama）などと表記する。このことはサマ自らが，異なる出自のサマを指示する場合におこなう慣行［Nimmo 1968; Sather 1997］でもある。

＊2　臨地調査はサマ語，フィリピン語，英語をまじえておこなった。本文ではサマ語をイタリックで表記し，英語と区別する。サマ語の正書法は Akamine［1997］にしたがうが，地名は慣用にしたがった。なお，調査当時の1フィリピン・ペソは約4円，マンシ島におけるペソとマレーシア・リンギットの交換レートは，100ペソが8.80マレーシア・リンギットに相当した。

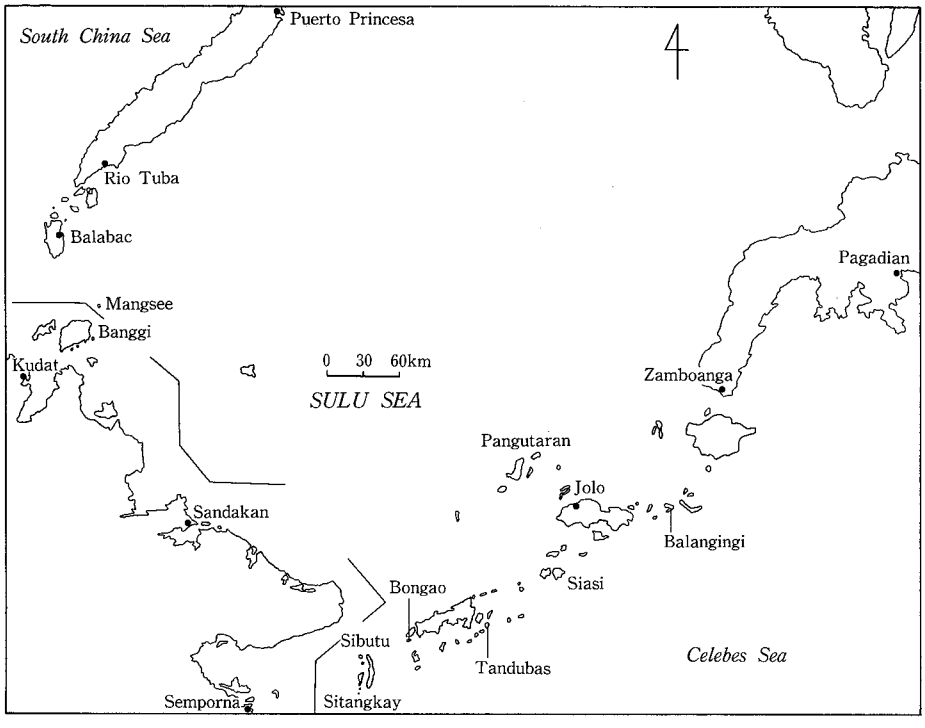


図1　スル海

東部沿岸部で採取されるウミツバメの巣などが主な交易品であった。これらの産物はいずれも自家消費用として採取されるのではなく，圏外の市場，特に中国市場を最終目的地としたために，南海産資源［秋道 1994］あるいは特殊海産物［鶴見 1987］と呼ばれている。サマの一部は船住まいをし，漁場を移動しながら特殊海産物を採取し，スル王国経済の一翼をになっていた［Warren 1981］。

スル王国にとって海産物交易は経済活動であると同時に，階層間の保護・被保護関係を象徴する意味も持っていた。民族学者のキーファーは，スル王国を「分節国家」(segmentary state) と表現し，その政治体制が細かな階層に分れ，それぞれの階層が保護・被保護の関係で結ばれていたことに注目している［Kiefer 1972］。

保護者への朝貢はさまざまな形態で具現化された。村や島の実力者に対して，サマは特殊海産物にかぎらず鮮魚や干魚なども献上したし，船頭や水夫としても奉仕した。その見返りとして，キャッサバ，ベテルナッツ，ココナツ，布，鉄製品など農産物や生活物資を得た。

しかし，サマがなによりも求めたのは安全の保障だった。暴力が日常的なスル諸島では，スルタンから下々の階層の人間にいたるまで，上位者からの「保護」なしには生活が困難であったからである。民族学者サザーは，この互酬的な交換関係をパトロン・クライアント関係と分析している［Sather 1984 : 13-14］。

つまり，サマの漁業活動は，スル王国の

経済と政治の両面において重要な意味を持っていたのである。「船住み」と「移動」という生活形態を強調した「国家なき辺境の民」といったサマ像［床呂 1996：184］も，こうしたスル王国におけるサマのあり方を反映しているといってよいだろう。

サマの漁業活動についてのもうひとつの視点として，自然条件や社会的特質と漁撈との関連がある。広い海域に点在するサマは，それぞれの地域に適応した多様な漁法を生みだしてきた。主にシタンカイ海域でサマの調査を続けている長津［1995a；1997］は，スル諸島南西端に位置するシタンカイ・サマが，自然的条件に適応した漁法を豊富に持っていることを明らかにした。たとえば礁池，礁縁，汀線などの環境条件により，また時間帯・潮の状態などによって，シタンカイ・サマは12種の網漁を区別している。手釣りについては擬似餌の種類によって3種を，突き漁ではエイや小型のサメ，ナマコなどを対象としたもののほか，イルカを対象としたもの，ウミガメを対象とするものの3種を区別している。トゥワ（*tuwa*；学名 *Derris elliptica*）と呼ばれる蔓性植物の根を用いた魚毒漁やシャコ釣りもおこなっている。

また，ニンモはスル諸島北部と南部とでは漁業形態に差異がみられることを早くから指摘している［Nimmo 1968］。シアシ（Siasi），ホロ，バシラン（Basilan），サンボアンガ（Zamboanga）などのスル諸島北部のサマ（以下，北部サマと称する）は，パラワン島近海からボルネオ島東岸，セレベス海，マニラ湾岸までへも遠征する。それに対して，シタンカイ・サマを含むシブツ（Sibutu）やタウィタウィ（Tawi-Tawi）などスル諸島南部に生活するサマ（以下，南部サマと称する）は，自らが居住する島の近隣海域のサンゴ礁域でしか操業しない。両者にみられる差異は，北部サマが男性だけで共同漁に従事する一方で，南部サマが核家族を単位に小規模に漁をおこなう［Nimmo 1968：38］点にも顕著である*3。

上記のように，サマの漁業活動についてはかなりの研究蓄積がある。しかし，長津の調査地域であるシタンカイは小規模漁業が支配的であるし，南部サマと北部サマにみられる漁業活動の相違に着目したニンモも，北部サマの漁業活動についての詳細を記していない。従来の研究にみられる問題点をわたしが関心をよせる南沙諸島海域におけるサマの漁業活動の視点から整理すると，①特殊海産物ばかりを採取する小規模漁業者としてサマを位置づけてきたこと，②共同漁に関する記述がなされてこなかったこと，③漁撈技術の記述ばかりに偏っていて，漁獲物の流通・消費までを視野に入れた漁業活動を全体的にとらえる試みがなされてこなかったこと，の3点にまとめることができる。

こうした従来の研究傾向に留意したうえでサマの漁業活動を記述するには，サマの漁撈をより一般的な漁業形態の枠組みにて

＊3　シタンカイ・サマは小船をつらねて，マグアンビット（*mag-ambit*）と呼ばれる追込み漁を集団でおこなうが，この漁は宗教儀礼的な意味合いが強く，現在ではほとんど実施されていない［長津 1995b：27］。

らして考察すること，およびサマの漁撈の歴史的変化を視野に入れることが重要となる。つまり，サマの漁業活動を資本と技術の関係やサマの置かれている政治経済状況を視野に入れて，動態的にとらえる努力が求められているのである。

前者については，フィリピンの漁業活動をその規模に着目して小規模漁業・中規模漁業・大規模漁業の3形態に区別したスポイラー［Spoehr 1980］の研究が有効である。小規模漁業は個人単位でおこなわれる一方，中規模漁業は漁業に従事しない資本家が乗組員を募って集団で漁業をおこなう形態をさす。さらに，10万米ドル以上の資本を投資しておこなうものを大規模漁業として区別する［Spoehr 1980：9-10］。

スポイラーの3分類にしたがうと，シタンカイ・サマや南部サマの漁業活動は小規模漁業，北部サマの共同漁は資本を必要とした商業的色合いの濃い中規模漁業であると考えられる。そして，本稿でとりあげる南沙諸島海域で展開されているサマの漁業活動も中規模漁業と分類されよう。したがって，中規模漁業に特徴的な資本と技術，市場の性格や労務関係のあり方などが分析されねばならない。

このような視点は，サマの漁撈活動を「歴史的」にとらえることでもある。仮にサマが自給用の漁撈と華人市場を相手にした特殊海産物の生産に特化していた民族であったとしよう。たとえそのように仮定したとしても，それほどに特化した生活様式が成立しうる流通機構が，18世紀から今日にいたるまで変化せずに存在しうるのか。前植民地期における流通事情と植民地期におけるそれ，さらには独立後のフィリピン共和国における流通機構にみられる差異とが明確にされねばならない。

この点については，サバ州のサマを事例にサザー［Sather 1985；1997］が，きわめて興味深い研究をまとめている。交易品としての特殊海産物生産だけでなく，近隣のサマ集団どうしで構成される干魚や日用品などの交換・交易圏が，スル王国末期に成立していたとするサザーは，この地域共棲交易ネットワーク（local symbiotic trade network）［Sather 1985：168-172；1997：30-33］が，次第に互換的な関係から商業的なものに転化した過程を跡づけた。スル諸島のサマに限って述べるならば，スペインがスル王国の交易拠点だったホロ島のホロやマインブン（Maimbung）を攻撃するようになったり，ボルネオ島のタワウ（Tawau）やサンダカン（Sandakan）などの交易港が発達［Warren 1981：129-131］したり，英国北ボルネオ勅許会社（The British North Borneo Chartered Company）がセンポルナ（Semporna）に交易拠点を形成［Sather 1984：15］したり，1920年代以降に綿製漁網，発動機，ナイロン製漁網などの漁業技術が次々と革新されたり，1960年代以降のサバにおける森林開発とそれにともなう土木工事景気やフィリピンの政情不安を背景として移民が流入してきたなどのさまざまな要因が，サマの経済活動を変容させてきた。

この過程において，すべてのサマが同じような境遇にあったのではないことにも留意しなければならない。たとえば1970年代にサバへ流入したサマ難民が，サバで「合法」的に生活するには，ジャミン（*jamin*）と呼ばれる身元引受人を必要とした。身元

を保証する条件として，サマ難民を漁業活動に従事させるマレーシア国籍を持つサマも登場している。操業費を身元保証人が用意するかわりに，水揚げのすべてを市場価格より安く身元保証人が買取った。このような契約労働に従事する難民を「隷海民」(maritime dependents) とサザーは呼び，身元保証人と隷海民とにみられる関係をスル王国体制にみられたパトロン・クライアント関係の復活と解釈している［Sather 1984：24-25］。

また，インドネシアのサマについては，さまざまな種類の水産資源規制や外部需要に応じて，サマが新しい漁法を受容してきたことを秋道らは北スラウェシ州ティラムタ村とマルク州カヨア村の事例から指摘した［Akimichi and Supriadi 1996；秋道・田和 1998］。現在，上記の村々ではまき網漁が盛んであるが，これは1980年代以降に底曳網漁が禁止され，それにかわる漁法としてまき網漁が導入された事情に因っている。また高額な資本を必要とする敷き網漁もバチャン島のサマには受け入れられている。1980年代後半にバチャン島周辺で日本の援助によってカツオ漁が開始されると，カツオ漁の生餌として利用されるキビナゴなどを獲るために敷き網漁が導入されたのである［秋道・田和 1998：69-77］。

さらに海藻の養殖やハタの蓄養は，サマにとって新しい漁業活動である。長津［1995b］は，1970年代に盛んとなった海藻養殖に言及し，サマの海とのかかわり方の多元性を指摘した。長津はサマの漁業活動を，①干魚などの域内交易品生産，②ナマコやフカヒレ，アワビなど華人向けの特殊海産物採取，③海藻など世界市場向けの交易品生産，の3部門に分類し，サマの漁業活動は常に外部からの需要の増減にしたがって，各部門の占める割合が伸縮を繰り返してきた［1995b：28-31］と分析している。

このようにサマのおこなう漁業活動は，周辺地域との関係だけではなく，広域にわたる地域と重層的・流動的に結びついている。当然のことながら，その結びつき方は決して一様ではない。現在のサマの漁業活動にみられる多様性は，それぞれのサマ集団の自然環境と社会経済的状況に適合した生業形態を発達させてきた結果である。サマをたんなる特殊海産物を採取する漁民ととらえることなく，さらにサザー，秋道，長津らの指摘の批判的検討も含めて，広大な海域に点在するサマの漁業活動について資本，技術，労働組織，市場・流通に関する実態研究が求められている。本稿はその作業のひとつに位置づけられよう。

以下，Ⅰ章において調査地の概観を示したあと，Ⅱ章ではマンシ島にみられる小規模漁業について略述する。Ⅲ章は，調査地において主要な漁業活動である爆薬漁と潜水漁のふたつの中規模漁業について，漁法と加工の技術的側面を中心に報告する。続いてⅣ章では海産物の流通について触れ，Ⅴ章では分配方法・労働組織について言及する。最後に若干の考察と今後の研究課題を整理する。

Ⅰ．調査地の概観

バラバク町

バラバク町にはおよそ20の島が存在する。その主島であるバラバクは，面積およそ355平方キロメートルの火山島である。島の東岸部には低地が続き，ココヤシが植え

られている。南部には海抜576メートルの峰を最高に山々がつらなり，熱帯雨林を形成している。バラバク島以外の島々はいずれも小さく，隆起サンゴ礁から形成されたいわゆる「低い島」である（図2参照）。町の中心部はポブラシオン（*poblacion*）と呼ばれ，パラワン本島南部のリオ・トゥバ（Rio Tuba）とは，週2～3便の連絡船によって結ばれている。

バラバク町の人口は，21,480人（1995年国勢調査）で，20の村（バランガイ，barangay）から構成されている。1990年の国勢調査によると，バラバク町に居住する民族でもっとも多いのは，サマの6,237人，次にこの地域の先住民族であるモルボグ（Molbog）の5,292人となっている。モルボグはパラワン島南部からバラバク島，マレーシアのバンギ（Banggi）島にかけて居住し，焼畑耕作を主な生業とする。このように，サマとモルボグでバラバク町人口の半数以上を占めるが，町の中心部人口のほとんどはタガログ（Tagalog）やイロンゴ（Ilonggo）などのキリスト教徒である*4。ムスリムの多くはマンシ島やバンカラアン（Bangkalaan）島，ルンブヤン（Lumbuyan）島などに居住している。いずれも隆起サンゴ礁島であるため土地が痩せており，ココヤシとキャッサバ，果樹が小規模に栽培されているにすぎない。バラバク町では1980年代に海藻（アガルアガル）が盛んに養殖されていた［Blanchetti-Revelli 1993］。しかし，現在では衰退し，海藻養殖はマタングリ（Matangguli）島周辺にわずかにみられるだけである*5。マンシ島とルンブヤン島は海峡に接しているため，海藻養殖には適さないものと思われる。

マンシ島

マンシはバラバク島の南東およそ60キロメートルに位置し，南北ふたつの小島からなっている。北マンシ島はココヤシが植えられているだけの無人島であり，一般にマンシといえば南マンシ島をさす。以下，本論でも南マンシ島をたんにマンシ島と称すことにする。バラバク島とマンシ島の間を定期的に結ぶ船はなく，貨物船が週に1～2回巡航するだけである。片道の船賃は150～200ペソが相場である。

マンシ島は周囲約3キロメートルの隆起サンゴ礁島である。島はまったくの砂地であり，農業には適していない。魚介類以外の食物は，ほとんどすべてを島外からの輸入に頼っている。サバから輸入した米の小売り価格は，キログラムあたり18ペソである（1997年7月当時）。島には常設の市場はなく，定期的に市がたつこともない。魚や野菜は家々の軒先で売られたり，子どもが売り歩いたりする。バンカラアン島やマ

＊4　ポブラシオン地区には，建設計画はあるものの，現在のところモスクは存在していない。また，フィリピンのココヤシ王と呼ばれるコファンコ（Cojanco）がブグスク（Bugsuk）島とパンダナン（Pandanan）島にココヤシ・プランテーションを所有している。そこの労働者のほとんどはキリスト教徒である。

＊5　マタングリ島における栽培法の主流は，タウィタウィ州のシタンカイ周辺地域でみられる棹式とは異なり，浮子（floating）式である。マタングリ島で海藻養殖に従事しているのは，主に西サマ語話者のパグタラン（Pangutaran）である。マタングリ島のパグタラン・サマも，スル諸島中央部パグタラン島周辺から内戦を避けて，1970年代以降に移動してきた人々である。

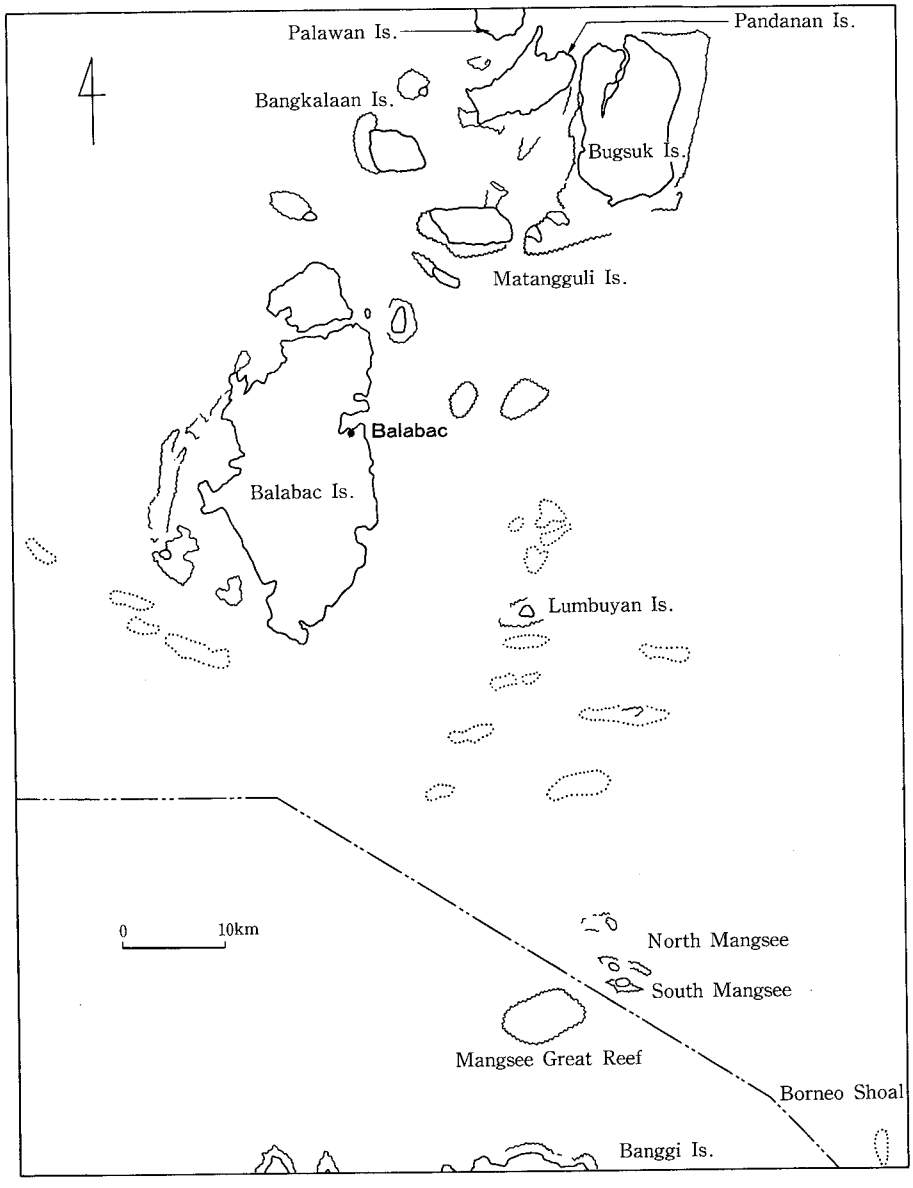

Palawan Is.
Pandanan Is.
Bangkalaan Is.
Bugsuk Is.
Matangguli Is.
Balabac
Balabac Is.
Lumbuyan Is.
0
10km
North Mangsee
South Mangsee
Mangsee Great Reef
Borneo Shoal
Banggi Is.

図2　バラバク町周辺

タングリ島，ルンブヤン島ではキャッサバ栽培がなされており，それらの集落から不定期にキャッサバを売りに来ることがある。

マンシ島住民の生業はほとんどが漁業であるが，マレーシアとの間で交易をおこなう者も少なからずいて，その多くは同時に日用品を扱う小売店を経営している。マンシ島近海ではマニラやバコロドなどに船籍を持つ大型漁船も操業しているため，マンシはそれらの漁船へ飲料水や食糧をはじめとした生活物資を供給する基地としても機能している。島の中央にはバスケットコートがあり，夕方になると大型漁船の乗組員たちが余暇を楽しむ光景を目にすることが多い。

行政単位のバランガイとしては，マンシと隣のルンブヤン島とで「バランガイ・マンシ（マンシ村）」を構成している。1995年の国勢調査時点でのマンシ村の人口は6,162人である。そのうち，マンシ島だけの世帯数と人口を約900戸，5,700人とマンシ村長は見積っている。このうち約300人がビサヤ諸島出身者を中心としたキリスト教徒である。それ以外はほぼ全員が，タウィタウィ州，タンドゥバス（Tandubas）島のウグス・マタタ（Ungus Matata）村出身のウグス・マタタ・サマ（以下ウグス・サマと略記）である。マンシ島居住者のほぼ9割がムスリムであり，島内には4カ所のモスクがある。毎年20名前後がメッカ詣に赴いている。

マンシ島は1970年代のフィリピンの政情不安を背景に，ここ20〜30年の間に大きな変化を経験した。1972年9月にマルコス大統領によって布告された戒厳令をきっかけとして，スル諸島の各地でMNLF（Moro National Liberation Front モロ民族解放戦線）とフィリピン政府軍との間で内戦が起った。さらには治安維持を理由に，国家警察軍（Philippine Constabulary）の横暴も目立つようになった。このような状況のなかで，ウグス・サマはマンシへ移動を開始した。74年にはMNLFの本拠地だったホロ島が政府軍の爆撃にあって半壊し，タウスグなどのホロ島住民は避難を余儀なくされた。かれらの一部には北方のサンボアンガ方面へ移動したものもいたし，南西のタウィタウィ方面へ移動したものもいた。タウスグとの衝突を避けるために，タウィタウィ州の各地に生活していたサマも，さらに南西方面へ移動した。タウィタウィ州東部に生活していたサマの一部が同州西部のシブツへ避難した一方，シブツ・サマはボルネオ島東岸へと移動した。この現象は内戦による「ドミノ効果」として知られている［Nimmo 1986: 31］。

またウグス・マタタ村にはMNLFの司令官が駐在していたため，ウグス・マタタ村でも74年にMNLFと政府軍とが交戦し，MNLFは村を焼いてしまった。戒厳令の発動よりも，むしろこの戦闘がウグス・サマの人口流出の大きな要因となった。バラバク町役場出納役のハジ・アミルハムジャ氏の推定によれば，当時のウグス・マタタ村人口の3割から6割までが流出し，そのほとんどがバラバク町，なかでもマンシ島へ移動したという。1975年にマンシに小学校が建設されたことも，74年に島の人口が急増したことを示すひとつの傍証となろう。

ウグス・マタタ村からバラバク町への人口移動は現在も続いている*6。しかし，最近の人口移動と1970年代・1980年代に生じ

た内戦の避難民とを同様に考えてはならない。昨今のそれは現金収入の機会を求めてマンシに移動してくる「経済難民」と解釈すべきである。なぜならば，ウグス・マタタ村の主たる生業にはココヤシ栽培と小規模漁業しかなく，現金収入を得る手段に乏しいからである。さらに，ウグス・サマ以外にもミンダナオ島西部や北部からも，現金収入の機会を求めて流入してくるビサヤもいる。かれらもまた「経済難民」であることは，後述するようにかれらがサマよりも劣悪な条件で潜水漁に従事していることからも明らかである。

ウグス・サマの移住生活を当初から支えてきたのは，南沙諸島海域における爆薬（ダイナマイト）漁であった。現在では，潜水器（air compressor）を用いるナマコ潜水漁もおこなわれている。上記のようにマンシ島は，①1972年の戒厳令を契機として漁業基地に発展してきたこと，②マンシ島のサマによる漁業活動が南沙諸島を漁場とした共同漁業であり，③漁期も1～2カ月と長期間であること，④共同漁は商業的性格の濃いものであること，したがって，⑤操業には多額の資本を必要とすること，⑥ビサヤなど他民族も漁業活動に参加していること，といった点において，サマの漁業活動の実態を知るうえで興味深い事例を提供してくれる。

さらに，1970年代にフィリピン南部からマレーシアのサバ州へ多くのサマが流出したことはよく知られている［Nimmo 1986; Sather 1997; 鶴見 1986］が，同時期にパラワン方面へ移動したサマについてはブランチェッティ－レベッリが記述しているにすぎない［Blanchetti-Revelli 1993］*7 ことも考慮して，マンシを今回の調査地とした。

最後に，南沙諸島海域について簡単に触れておく（図3参照）。南沙諸島は，東沙諸島（英名 Pratas Islands），西沙諸島（英名 Paracel Islands），中沙諸島（英名 Macclesfield Bank）とともに南シナ海における4諸島群のうちのひとつである。北緯4.5度から12度，東経110度から117度にかけての総面積およそ18万平方キロメート

＊6　1989年の時点ではキリスト教徒勢力がムスリム勢力よりも強かった［Blanchetti-Revelli 1993］が，1992年の選挙で初めてムスリム町長（ウグス・サマ）が選出された。キリスト教徒とムスリムとの人口比の逆転は，1990年以降にもムスリム人口が急増していることを示唆している。現職の副町長も1990年にウグス・マタタ村から移住してきたサマである。

＊7　パラワン方面へのサマの人口移動に着目したブランチェッティ－レベッリの進取性は評価できるが，かれもニンモやサザーと同様にサマの人口移動を「難民」として受動的に描いている。マンシ島のサマがウグス・マタタ村から内戦を逃れてきた人々であることに違いない。しかし，その移動には「難民」という消極的な背景だけではなく，「フロンティア」を模索する積極性も存在したのではないだろうか。1970年代にみられたサマの人口移動をすべて「難民」として位置づけてしまうと，ウグス・サマが辺境ながらもフィリピン国内にとどまり，マレーシアを選択しなかった事実を見落としてしまう危険性がある。それは東南アジア海域世界にみられる移動・分散性の強い性格［鶴見 1984］のあらわれとも無関係ではないはずである。

＊8　南沙諸島は中国語名であり，上記の4諸島群を中国では南海諸島と呼んでいる。南沙諸島はベトナムでは長沙（チョンサ），フィリピンではカラヤアン（Kalayaan）（フィリピン語で「自由」の意）諸島と呼ばれている。南沙諸島の領有をめぐっては，過去150年間にわたってさまざまな紛争が生じてきた。現在も中国，台湾，マレーシア，ベトナム，ブルネイ，フィリピンの6カ国が領有権を主張している［Buchholz 1987］。このような事情を考慮して，中立的な英語名である「スプラトリー」の使用を主張する立場もある（毎日新聞マニラ特派員として，フィリピン海軍とともに南沙諸島を航海した大野の報告［1997：265］を参照のこと）。

ルにわたる海域に10ばかりの島と無数の環礁が散在する。この海域を英語ではスプラトリー諸島（Spratly Islands）と総称するが，本報告では日本の報道でも馴染みある「南沙諸島」を用いることにする*8。

II．マンシ島の小規模漁業

マンシにみられる中心的な漁業活動は南沙諸島海域における爆薬漁とナマコ潜水漁のふたつであるが，マンシ島近海では小型動力船を用いた曳釣り漁もおこなわれている。近年では高価なハタ科の底魚を目的とした釣り漁が盛んである。礁原でアワビ（*lappas*，正確にはトコブシの類）を採捕することもある。

アワビ漁

女性はふつう，干潮（*tabba*）時にサンゴ礁でタコや貝類，ウニなどを採捕する。それらの漁獲物は総称としてタッバハン（*tabbahan*）と呼ばれる。それらは日本のアマのように潜水するのではなく，サンゴ礁を渉猟して捕獲される。

タッバハンの採捕活動は昼間に限られるが，アワビは夜行性であるため，アワビ漁だけは夜間におこなわれる。アワビ漁をおこなう人々は，午後5時頃に出漁し，午後10時頃に帰島する。アワヒ漁は，満月時と新月時の月2回，それぞれ3日間前後おこなわれている。アワビ漁には女性も多く参加するが，アワビ漁以外には夜間に操業する漁撈活動に女性が参加することはない。

マンシ島の近くにはサマ漁民がマウハ（*Mauha*）と呼ぶマンシ大岩礁（Mangsee Great Reef）がある。マレーシア領であるが，マウハで曳釣り漁をおこなうことも少なくない。アワビ漁も同様である。

事例1

1997年7月20日は月齢16日であった。この日の夕方から25人（うち女性は11名）が6隻の船に分乗してアワビ漁に出かけ，合計31キログラムの収獲があった。収獲は海面が凪いでいるかどうかにもよる。ほぼ同人数であったにもかかわらず，翌17月夜の収獲は海が凪いでいたために，前日比1.6倍の49キログラムもあった。25人が収獲したアワビは殻付きの状態で，大きさに関係なく一律キログラムあたり80ペソで，島に居住するサマの仲買人に買取られた。

仲買人は買取ったアワビの身を乾燥させて，セブやプエルト・プリンセサに出荷する。塩漬けしたのち，茹でてから天日に干した完成品は，Lサイズだとキログラムあたり840ペソ，Sサイズでも400ペソ以上で取引きされる。貝殻はサンボアンガへ出荷され，キログラムあたり20ペソで売られる。仲買人の話によると，サンボアンガからは韓国へ輸出され，螺鈿細工の原料として利用されるものと思われる。

生簀業

活魚（live-fish）は離礁（*takot*）において手釣りで捕獲する。わたしはインドネシアのスラウェシ島，トミニ湾のアナム島でサマが竹かご（*bubu*）を仕掛けているのを見たことがあるが，マンシ島では竹かごは使用されていない。餌は近海で操業しているマニラ船籍などの大規模漁船からアジやイワシなどを譲り受けるか，爆薬を用いて捕獲したタカサゴ属の魚を用いる。

0 200 400 600 800 1000km
100
黄海
東シナ海
上海
台北
太平洋
ハノイ
香港
東沙諸島
中沙諸島
マニラ
南シナ海
西沙諸島
イロイロ
セブ
プエルト・プリンセサ
スル海
ダバオ
リオ・トゥバ
パラワン
サンボアンガ
南沙諸島
クダット
ホロ
セレベス海
バチャン
シンガポール
タウジュン・バンダン
ジャカルタ
クパン

図3　南シナ海

マンシ島には，活魚を扱う仲買人が3者いる。かれらは，魚を生簀（*paldu*）に蓄養しておき，一定量に達した段階でサバ州のクダットへ出荷する。インドネシアでみられるように香港などから大型船が直接買付けに来るような例［秋道 1995：164-165］は，マンシではみられない。

対象となる魚はマミン（*maming*，学名 *Cheilinus undulatus*，和名メガネモチノウオ），クビン（*kubing*，学名 *Cromileptes altivelis*，和名サラサハタ），スヌ（*sunuq*）と呼ばれるハタ科の魚（Epinephelidae）である*9。メガネモチノウオとサラサハタはキログラムあたり400ペソ以上，スヌはキログラムあたり330ペソで売買される*10。

III．中規模漁業：漁法，加工方法

マンシ島における中規模漁業では，構造船クンピット（*kumpit*）が用いられる。爆薬漁とナマコ潜水漁に用いられる構造船の竜骨は，それぞれ14メートルと10メートル程度がふつうであり，ナマコ潜水漁のほうがひとまわり小さな船を用いる傾向にある。発動機の大きさは，爆薬漁の場合には65～110馬力，ナマコ潜水漁の場合には30～50馬力がふつうである。

1．漁法

爆薬漁

マンシ島における中規模漁業のひとつは爆発物を用いた爆薬漁である*11。爆薬漁には13～15人の乗組員が乗船し，操業は2カ月間におよぶ。

爆薬漁がタウィタウィ海域に入ってきたのは戦後のことである。当時は不発弾から抜き出した火薬が用いられたが，現在では化学肥料が爆薬の原料とされている。1990年代初頭まで米軍は南シナ海のスカルボロ礁（Scarborough Shoal）近海で実弾演習をおこなっていた。マンシ漁民のなかには，スカルボロ礁まで赴き不発弾を探し，その不発弾の火薬を利用したものも少なくなかったという。火薬のほうが化学肥料より爆発の威力が大きいからだ，と説明を受けた。

マンシ島では，クダットから仕入れた硝酸アンモニウム（ammonium nitrate）が広く使用されている。マンシ島での取引き価格は，25キログラム入りの1袋が460ペソである。硝酸アンモニウムはビールなどの空ビンに詰めて使用される。大ビン（620ミリリットル）が利用されることが多いが，小ビン（320ミリリットル）が用いられることもある。群れの大きさによってビンを選択し，魚群の深さによってはオモリをかえ

＊9　サマ語ではハタ科の魚は一般にコハポ（*kohapoq*）と総称される。しかし，*Plectropomus leopardus*（和名スジアラ），*P. areolatus*（和名オオアオノメアラ），*Epinephelus quoyanus*（和名キビレハタ），*E. fuscoguttatus*（和名アカマダラハタ）などはコハポと区別され，スヌと呼ばれている。

＊10　サラサハタとメガネモチノウオの捕獲は，熱帯観賞魚とともに資源保護の目的から，1994年にパラワン州の州令 Provincial ordinance 第29条で禁止されている。マンシではチョウチョウウオやクマノミなどの熱帯観賞魚を捕獲する事例はみられないが，サラサハタとメガネモチノウオは捕獲の対象となっている。

＊11　爆薬漁は英語では一般に explosive-fishing もしくは dynamite-fishing, blasting-fishing と呼ばれ，日本語でも「ダイナマイト漁」と呼ばれることもある。爆薬の原料に火薬ではなく，化学肥料が用いられていることから，誤解を避けるために本稿では「爆薬漁」と記す。

なくてはならない。ビンの選択とオモリの調節には経験がいる。

大ビンのほとんどはサバから輸入され，ビンを洗浄し，乾燥させることを専門に請負う職業が確立している。洗浄済みの空ビンは1本1ペソで売買される。化学肥料の1袋は大ビンに換算して50本分の爆薬に相当する。2カ月間の航海では，35袋（875キログラム）分，約1,750本を使用する。

漁民の説明によれば，爆発の振動で浮き袋が完全に破裂すると魚は海底に沈む。しかし，不完全に破裂したままだと，魚は海面に浮かんだままである。海面に浮かんだ魚と海底に沈んだ魚を拾い集めるのが乗子の仕事である。仮死状態の魚は死んだように横たわっていても，摑もうとすると逃出すことが多い。その際に背ビレなどで手のひらを切ることもある。以前は素潜りであったが，1990年代半ば頃から潜水器を用いるようになった。

爆薬漁においては，スリッグ（*sulig*，タカサゴ属 *Caesio* spp.）がもっとも望ましい魚であると考えられている。スリッグは水中で群れをなして泳いでいるため，群れを発見した後に，そこに爆薬を投げ込みさえすれば，一網打尽にすることが期待できる。手釣り漁と比較した場合，爆薬漁では「瞬時にして大量に捕獲できる」利点を強調するサマが多い。したがって，爆薬漁においては魚群を発見することが第一の作業となる。群れていなければ効果が薄くなるし*12，出荷に際しても同じ種類の魚ごとにまとめなくてはならないので，スリッグ以外の魚は爆薬漁においては捕獲対象となりにくい。

スリッグは，背開きにし，塩をまぶした後に船底で保存される。魚を塩蔵するために，12.5トン（50キログラムの袋を250個）の食塩を持参する。

スリッグはタガログ語ではダラガン・ブキッド（dalagang bukid，「田舎娘」の意）と呼ばれている。マニラでの物価指標としてバグース（bangus，学名 *Chanos chanos*，和名サバヒー）とともに機能していることにも明らかなように，スリッグは，フィリピンの大衆魚である。スリッグが大衆に人気の魚であることも，爆薬漁においてスリッグが求められる理由のひとつだと思われる。手釣り漁では高価な魚を求め，爆薬漁においては人気もあり，量的にも多く捕獲できる魚を求める傾向が指摘できる。

ナマコ潜水漁

ナマコ漁は，南沙諸島海域で通常1カ月間操業する。潜水夫はサマではなく，そのほとんどがビサヤ諸島出身のキリスト教徒（以下，ビサヤと総称する）である。潜水にあたっては魚群探知機で事前に水深と海

＊12　1992年12月31日に筆者がタウィタウィ州のN島で観察したA氏の事例を紹介する。A氏はN島の近海で小規模漁業を営むサマである。午前8時半，A氏は息子1人を連れて出漁した。A氏は網を所有しておらず，爆薬漁のほか手釣り漁や突き漁をおこなう零細漁家である。観察当日の漁の目的は，当初から爆薬漁であり，爆薬を詰めた小ビン10本を持参した。N島東側の礁縁近くの漁場に着いた時点で，爆薬漁の準備にかかった。ゴム栓を抜いて，信管を埋め込んだのちにゴム栓を再びはめ込む。ビンとゴム栓の接合部にビニール袋をかぶせ，その上をゴムひもできつく縛る。A氏が海中を覗き魚群を探す間，息子は船が位置を移動しないように櫓を小刻みに操る。A氏は1時間かけて魚群を探したが，見つけられなかったため，爆薬漁をあきらめて水中銃による突き漁に予定を変更した。1本15ペソの投資に対して，漁獲量が期待される割に合わないと判断したためである。

底の地形を調べる。水深30～40メートルの海底で作業するのがふつうで，潜水器を使用する。

東南アジア海域において，潜水器を使用する事例は珍しいことではない。たとえば，フィリピンのビサヤ海域やインドネシアのスラウェシ島各地で高級魚を捕獲するために竹かごを設置したり，高級魚を水中銃で撃つ場合に，潜水器が使用されているのをわたしも観察したことがある。そのさいに副産物としてナマコが採られることがあっても，潜水の主目的はナマコ採取ではなかった。これまでに報告されているナマコ漁は素潜りかヤスを用いる突き漁が多く，潜水器を用いるのは，フィリピン海域においては，南沙諸島海域だけに特徴的なことである*13。また，魚群探知機を使用する事例も管見のかぎりではない。

マンシ島を基地として，このような大規模なナマコ潜水漁がいつから存在したのかは，今回の聞き取り調査では，はっきりさせることができなかった。また，どのような契機を経てナマコ潜水漁が普及したのかも知りえなかった。

マンシ島漁民の話によれば，1977年にはパラワン島近海におけるナマコ漁においてすでに潜水器が使用されていたという。潜水器が導入される以前は，素潜りでナマコを手摑みにし，突くこともなかった。オモリを抱えて海に飛び込み，海底に到着したらオモリをはなす。命綱となるロープを腰に巻きつけておいて，苦しくなったらロープで船に合図する。そしてロープと一緒に水面まで引き上げてもらう。オモリは命綱とは別のロープに結びつけておき，別個に引き上げた。この方法で，漁民は水深30メートルは潜っていたと推定される。

平均的なナマコ潜水漁には，潜水夫10名，料理係4名，雑役夫1名の合計15名が乗船する。潜水夫はほぼ全員がビサヤ地方出身のキリスト教徒である。それ以外の船上での作業はサマがおこなう*14。

潜水はタンクを背負うスキューバ式ではなく，潜水器から送り出される空気をホースに流すフーカー（hookah）式である。2人1組がペアとなって潜る潜水夫たちのホースが互いに絡み合わないように雑役夫は調整する。ホースは潜水夫の命綱ともいえるものなので，重要な役目である。1回の潜水時間は通常30分であるが，捕獲量によっては1時間近く潜ることもある。それぞれの水深は30～40メートルである。

マンシ島では1990年代半ばからチャシ（*casi*）と呼ばれる魚群探知機が導入されている。チャシはマレーシア語による呼称と考えられている。チャシを用いることによって，事前に水深と同時に海底の地形が砂質なのか，あるいは泥質，岩質なのかに関する情報も得られるようになった。もっとも高級なナマコのドゥルアン（*duruqan*,

---

＊13　オーストラリア北部でもナマコ漁が盛んであるが，潜水器使用の報告はない［1997年10月，クパンの干ナマコ仲買人からの聞き取りによる］。ウジュンパンダン近隣のコディガレン島付近では，潜水器を用いたナマコ漁の報告［秋道・田和 1998：90］がある。

＊14　乗組員には，上記のような役割による名称が存在するが，乗組員全体を総称するサマ語の名称は存在しない。日本民俗学では「船主・船子（船方）」という漁撈組織上の区別がおこなわれるが，現段階では労務組織の分析は十分でないため，本稿では船主以外の乗組員を「乗子」と総称する。これは爆薬漁における乗組員も同様である。

学名 *H. fuscogilva*）が岩に接した砂地に生息していることが多いため，魚群探知機を活用してそのような地形を探すことが船頭の大切な役目である。

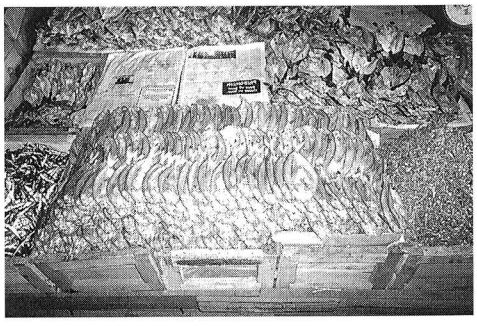
2. 加工

爆薬漁も潜水漁も，漁獲物が干物に加工される点においては共通している。しかし，干魚と干ナマコの製造過程には細かな違いがみられるため，本節では干魚，干ナマコの順に加工方法について報告する。

干魚の加工

干魚を作る手順を示す。①ウロコを取り，②二枚に開く，③海水で洗う，④塩に漬ける，⑤海水でもう一度洗う，⑥天日に干す，⑦竹かごにしまう。⑧荷を船に積み込む。船上の作業は④までで，⑤以降がマンシでの作業となる。⑧までの作業を乗子がおこなう。サンボアンガへ船が到着した後に，荷を降ろす作業には，サンボアンガ港に待機している荷役夫が雇われる。

マンシのサマ語では干魚をプンダン（*pundang*）と呼ぶ。プンダンは加工の品質に応じて一級品（first-class），準リジェクト（semi-reject），リジェクト（reject）の3等級に選別される。リジェクトとは粗悪な等外品のことである。頭が取れた魚はリジェクトとみなされる。乗子の話によれば，それぞれがキログラム単位で量売りされる



（上）サンボアンガの乾物市場にならんだスリッグ
（下）浜に干されたスリッグ

ため，個体の大きさは大切な要因とはならない。しかし，見た目に美しくなければならず，砂や土，ゴミなどが魚につかないように注意する*15。

干魚を売却したのち，代表者がサンボアンガからマンシに帰ってきた時点で，乗子たちは報酬の代分けを清算する。この慣行はナマコ潜水漁にみられるものとは異なっている。ナマコ漁の場合には，マンシ島に帰漁した時点で報酬を受取る。これは帰島した時点で，船主が潜水夫から塩蔵ナマコを買取るからである。このことは，形式上ながらも潜水夫と船主とが，それぞれ独立

＊15　ビサヤ海域のバンタヤン島の干魚製造現場について牛島は，「出来上がった干物が大きく見えるように丁寧に加工しなくてはならないため，身に包丁を入れるのは経験者が担当する」と報告している［1992：37］。しかし，マンシ島で生産される干魚では，大きさは価格を左右する要因とはなっていない。両者の違いのひとつには，マンシの場合には干魚の質よりも量で勝負する意図があるように思われる。そして，マンシ産のスリッグを購入する消費者も，品質にこだわっていないように見受けられる。

した経営主体となっていることを示している。これに対して爆薬漁の場合には，乗子は船主に雇われた「労働者」としての性格が強いように思われる。爆薬漁ではナマコ潜水漁のように高度な潜水技術を必要とはせず，容易に労働力を得ることができる。この労働力の違いが経営形態に差異がみられるひとつの原因であろう。

干ナマコの加工

ナマコは種類によって異なるが，もっとも高価なドゥルアンとバンクガン（*bang-kungan*，学名 *H. nobilis*）は船上で内臓を取り除き，塩漬けにして保管されることが多い。一方，それ以外のナマコは内臓を取り，煮熟し，燻してから天日で干し，準完成品の状態にまで船上で加工される。

すべてのナマコは船がマンシ島に着いた時点で，船主に買取られる。ドゥルアンとバンクガンは塩蔵のままサバ州のクダットへ出荷されることが多い。それ以外のナマコは天日に干してからパラワン島のプエルト・プリンセサへ出荷される。

極端に小さなものを除いて，買取り価格はナマコの種類によって決まっている。マンシ島での買取り価格の一例をあげると，ドゥルアン140ペソ，バンクガン50ペソ，ガマット（*gamat*）50ペソ，ラリパン（*lalipan*）40ペソ，タッディク（*taddik*）15ペソ，トンパ（*tompaq*）10ペソとなっていた（それぞれの学名は表１を参照）。いずれも大きさに関係なく，生ナマコ１個体の単価である。釣り漁と爆薬漁で捕獲される魚は，キログラム単位で取引きされるのに対して，生ナマコは個体価格である点で異なっている。

ナマコ潜水漁の船主のひとりハジ・アチャリ氏は，買取ったナマコはハジ自身が，①洗う，②煮る，③燻す，④洗う，⑤天日に干すという工程を経て乾燥させている。④の工程までは１～２日で十分である。⑤の作業も２～３日で十分だと説明を受けた。わたしが観察したかぎりでは，完全に干しあげるのではなく，ある程度に湿った段階でも出荷していた。

干ナマコに加工するためには燃料が必要である（特に②の作業）*16。マンシ島では，灯油バーナーでナマコを煮る。とはいえ，これは経済的合理性を追求したことではなく，燃材とする薪を求める林の不在によるものと思われる。マンシ島内では日常生活に必要な薪をまかなうこともできず，バラバクからマングローブの薪を購入することも少なくない*17。

しかし，薪不足という事情は，ナマコを捕獲・加工する地域がサンゴ礁海域に多いことを考えると珍しい現象とはいえない。たとえば，スル諸島の南西端，シタンカイ沖に位置するスワン・プクル（Suwang Pukul）集落はまったくの海上村である。

＊16　1820年代後半から1830年代半ばまでのフィジーの記録によると，約60キログラムの干ナマコを生産するのに約1.7立方メートルの薪が必要であった。燃材が不足していたために，フィジーでは薪の値段はナマコよりも高かった。また，1887年当時のニューギニアでは，１トンの干ナマコを生産するのに，９トンの薪を必要とした［Ward 1972：117-118］。

＊17　1981年の大統領宣言（Proclamation）第2152条によって，パラワンは州全体がマングローブの伐採禁止区域に指定されたことも，薪の入手が困難であることに拍車をかけている。マンシで流通するバラバク産の薪も不法伐採材として押収されることが多い。

したがって，燃材は流木を拾う以外は外部から持ち込まなくてはならない。スワン・プクルはシタンカイから10キロメートルしか離れていないため，仮にナマコを大量に捕獲した場合でも，シタンカイで加工することが可能である。いいかえれば，マンシではバーナーを導入せざるをえないほど大規模にナマコが獲られているのである。

IV. 干魚と干ナマコの流通

干魚の流通

1年を通じて価格が比較的安定している干ナマコと異なり，干魚の値段は季節によって変動する。たとえば，3月末から6月初旬にかけては季節風の変わり目にあたり，凪の季節となる。この時期は漁業に最も適しているので，鮮魚の水揚げも増える。サンボアンガでの干魚の卸値が下がるのもこの時期である。この時期は学校の長期休暇とも重なるため，都市人口が減少し，都市での学生を中心とした干魚の消費が減少することとも関係していよう。

漁業経済学者の岩切は，フィリピンにおける魚類の消費形態の比率を鮮魚60パーセント，塩乾魚30パーセント，缶詰やその他の加工品が10パーセントと推定している［岩切 1992：881］。このことからもフィリピンの魚類消費に占める干魚の比重が高いことがわかる。

さらに，干魚は都市部よりも内陸部の貧しい農村で多く消費される［Cuyos & Spoehr 1976：191；Sather 1997：15］傾向があることに注目しなければならない。干魚は直火で焼いたり，揚げて調理されるだけではない。野菜を炒めるときの出汁としても重宝する。沿岸から離れた内陸部においては干魚がタンパク質の補給源とともに塩分の補給源としても機能しているとも予想される。

マンシ島で加工される干魚は，そのほとんど全部がミンダナオ島西端の港町サンボアンガに出荷される*18。サンボアンガを経た後，ダバオに輸送され内陸部の農村部を中心に消費される。干魚の出荷先をサンボアンガに限定する理由について，「サンボアンガは馴染みがある街だから」という答えが多いなかで，「マニラでは薄塩の干魚が好まれるが，サンボアンガでは塩濃いものも売れる。だからサンボアンガに出荷する」と説明してくれた船主がいた。

このことは，フィリピンでも干魚の産地として有名なビサヤ海域のバンタヤン島で生産加工されるサバ科の干魚が，わずか数時間から一夜，塩に漬けただけで天日に干すうえに，干す前にはブラシで塩を落とす「減塩タイプ」である［牛島 1992：17, 37］ことと無関係ではないだろう。バンタヤン島の干魚はセブやバコロドなどの都市へ出荷される。そして，内陸部ではなく，沿岸部で消費されていると思われる。「マンシの干魚は，塩が強すぎるのでマニラでは売れない」というマンシ島民による説明も根拠のないことではないだろう。

味覚・嗜好傾向の要因に加えて，後で述

---

*18　爆薬漁船主のハッジ・シャフルディン氏は，1988年に一度カガヤン・デ・オロで干魚を卸したことがある。サンボアンガとあまり値段がかわらなかったが，少しでも売値のよい場所を求めて試験的に航海を試みたという。その後は，馴染みのあるサンボアンガに卸している。

べるようにサンボアンガの華人を中心とした流通機構の整備・発達が，サンボアンガが干魚の流通基地として機能している主要因である，とわたしは考えている。さらに，サンボアンガ市場の歴史的・地勢的な位置づけも考慮しなければならない。サンボアンガは第9地域（Region IX）として知られる西ミンダナオ地方の政治経済の中心地でもあるし，スル海域における経済の中心地として古くから栄えてきた交易都市である［Kurais 1979：51］。

ビサヤ地方には，セブをはじめとしてバコロドやイロイロなど大きな干魚の市場があるものの，第二次世界大戦前からそれらの需要を満たしてきたのはビサヤ海域の漁民であった［Spoehr 1980］。1960年代後半から始まったマンシ漁民による干魚生産は，後発だったゆえにビサヤ海域の市場に参入することが困難であったはずである。むしろ，マンシ漁民は，当初からビサヤ地方とは異なった市場に干魚を供給してきたと考えるほうが適切であろう。

ミンダナオ島では，1960年代後半から国内・国外の大資本によって森林伐採や鉱山開発，プランテーション開拓などの開発が始まった。それにともなってビサヤ諸島やルソン島から大量の人口移動がおこなわれた［池端・生田 1977：166-167］。かれらが消費したタンパク源として，マンシ島産の干魚が流通したと考えられないだろうか。そして，その流通の中心にいたのがサンボアンガとダバオの華人商人だった可能性が高いとわたしは考えている。

干ナマコの流通

現在のマンシでは少なくても18種のナマコが流通している*19。表1は，マンシ島のナマコ仲買人に聞いた話にもとづきナマコの名称と価格をまとめたものである*20。

干ナマコの価格

干ナマコは大きさによって値段が異なる。表1のM価格もP価格もいずれも，さまざまな等級に仕分けされた干ナマコのうち，最大サイズに与えられた価格を掲げた。

表2では，干ナマコの買取り価格が大きさによって異なる様子をプエルト・プリンセサの仲買ブリガオ氏の事例から示す。

表2のコルティド（*kortido*）は，プエルト・プリンサセでは，XL, L, M, S, SS, 等外品の6等級に分かれている。等外品は製品の大小を基準としていない。製品の形がねじれたものをさし，「本来なら買わないところだが，安くてもいいなら買ってやってもいい」という仲買の立場からの仕分け基準である。価格を低く抑え込もうとする仲買人の意図がうかがえる。よって高級品種でかつ，大きな干ナマコでもきれいに加工されていない場合には，最低の価格がつくことがある*21。

---

*19　19世紀初頭のマカッサル港では，30種の干ナマコが取引きされていた［Macknight 1976：6］し，同時期のスル諸島では33種の干ナマコが流通していた［Warren 1981：60］。

*20　ナマコの名称については，情報提供者の間でもサマ語・ビサヤ諸語やそのほかのフィリピン諸語の名称が混乱しており，言語を特定できない場合が多かった。表1ではサマ語以外と思われる言語を「プエルト・プリンセサ」の列に記した。学名に関しては大島［1962］，Gosliner *et al.*［1996］，Guille［1986］，South Pacific Commission［1979］，Cannon and Silver［1994］などを参照した。学名欄の空欄は，該当する資料を持ち合わせていないことを示す。

表1　マンシ島近海で流通しているナマコの名称と価格

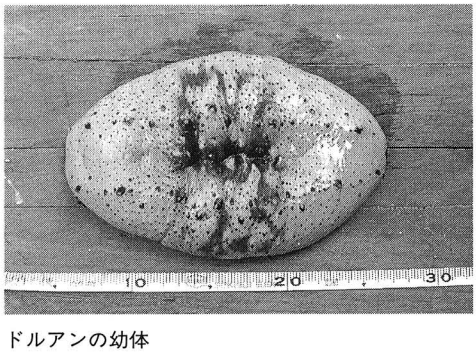
マンシ	プエルト・プリンセサ	学　名	M価格	P価格
bat poteq	kortido, kiskisan	*Holothuria scabra*	920	1,000
duruqan	susuqan	*H. fuscogilva*	900	850
gamat	hanginan	*Stichopus variegatus*	540	540
timpu	buliq-buliq	*Actinopyga* spp.	500	500
bangkungan	bakungan	*H. nobilis*	n/a	500
kuwarto	kuwatro	*S. chloronotus*	460	n/a
lalipan	dalipan/talipan	*Thelenota ananas*	380	350
dapaq	kaki		200	300
tagokan tayger	tiger	*Bohadschia argus*	200	160
lawayan	lawayan	*Bohadschia* sp.	145	160
le:gs	legs	*T. ananas*	130	110
langgowen	patola	*H. leucospilota*	110	80
red beauty	red beauty	*H. edulis*	110	80
brown beauty	brown beauty	*Holothuria* sp.	110	70
tompaq	sapatos	*H. fuscopunctata*	90	n/a
black beauty	black beauty	*H. atra*	67	70
pinya	pinya	*B. graeffei*	65	80
labuyuq	n/a	*Holothuria* sp.	30	n/a

註：空欄は不明。n/aは該当データが入手できなかったことを示す。M価格はマンシの仲買がプエルト・プリンセサの仲買に売る場合の価格，P価格はプエルト・プリンセサの仲買が買取る目安の価格を示した。M価格はマンシの仲買が所持していた売上げ伝票にもとづき，P価格はプエルト・プリンセサの仲買人ブリガオ氏からの聞き取りによる。いずれも単位はフィリピン・ペソで，キログラムあたりの価格である。
出所：筆者作成

表2　プエルト・プリンセサにおける干ナマコの個体の大きさによる価格差

	XL	L	M	S	SS	等外品
kortido	1,000	700	300	180	120	100
susuqan	850	800	600	300	該当無	150
hanginan	該当無	540	300	180	120	100
buliq-buliq	該当無	500	300	180	該当無	120
bakungan	該当無	500	300	120	該当無	100

註：単位はフィリピン・ペソで，1キログラムあたりの価格。出所：筆者作成



ドルアンの幼体

干ナマコの流通経路

マンシで加工された干ナマコはマレーシアのクダットとパラワン島のプエルト・プリンセサに出荷される。クダットへはもっぱら高級品種のドゥルアンとバンクガンが輸出される。クダットではそれ以外の種類の干ナマコは買取ってくれなかったり，買取り価格が極端に安かったりする。したがって，それ以外の干ナマコは，プエルト・プリンセサへ出荷されることになる。興味深いことに，マレーシア領のバンギ島漁民にもドゥルアンとバンクガン以外のナマコをマンシ島に持ってくるものも見受けられる。かれらによるとクダットよりもマンシのほうが価格が高いため，という。

マンシからプエルト・プリンセサへは船と車を乗り継いで出荷する。事例2は，マンシ島の仲買がプエルト・プリンセサへ干ナマコを出荷したときのものである。

事例2

1997年7月29日。リオ・トゥバ港から，マンシ島のナマコ仲買4人がプエルト・プリンセサへ向けて出発した。マンシ島からリオ・トゥバまで船を借上げ，リオ・トゥバからプエルト・プリンセサまではジープを借上げる。船とジープの借上げ代は4人で分担し合う。船の借上げ代は明らかではないが，ジープは片道3,000ペソで契約した。一行は子どもを除いて11人（うち女性が5人）の成人で構成されていた。女性はプエルト・プリンセサで日常品の買物が目的である。マンシ島でもインタビューに応じてくれた仲買人のカディル氏は干ナマコを12袋持参していた。うちブリブリ種がもっとも多い。今回はこれまでに取引きをしたことがない華人仲買のオビコ（Obico）に試験的に卸してみる予定である。カディル氏は最低でも70,000ペソの売り上げを見込んでいた。ほかの3人は，買取り価格次第で取引き先を決めるという。

プエルト・プリンセサには，少なくとも4軒の干ナマコ仲買商が存在する（1997年7月現在）。事例2が示すように，供給者と仲買との間には，決まった得意客関係は存在しない。供給者がそれぞれ条件のよい仲買に売っている。カディル氏のように実際に取引きをおこなう過程で，仲買の性質を見極めようとするものもいる。プエルト・プリンセサでは，仲買どうしで価格競争が繰り広げられている。そのためにシーズンにかかわらず，干ナマコの買値は変動しない。次に顧客を獲得するためのブリガオ氏の営業努力ともいえるサービスを紹介しよう。

事例3

プエルト・プリンセサでナマコ仲買商を営むブリガオ氏は，ミンダナオ島北部のディポログ(Dipolog)出身のセブ語話者である。プエルト・プリンセサに移住して9年になる。ブリガオ氏はディポログでも干ナマコとフカヒレの仲買をおこなっていたが，供給量が少ないうえに，供給が不安定だったので，プエ

＊21　インドネシアのティモール島の華人仲買人は，腹ではなく背をあやまって開いたドゥルアンの干ナマコをさし，「腹開きではないのでクズだ」と説明してくれた［1997年10月におこなった聞き取りによる］。同様に，姿，形の悪い干ナマコを神戸元町の問屋では「フウが悪い」といって好まない［鶴見 1993：16］。

ルト・プリンセサへ移ってきた。ブリガオ氏は干ナマコとフカヒレをマンシとパラワン島北部のタイタイを中心に仕入れている。1995年までは，ブリガオ氏自らが村々を買付けに歩いてまわった。信用が確立してからは，島々・村々の仲買にプエルト・プリンセサまで来てもらうようになった。そのさいには交通費，宿泊費，食費などの出費の実費分をブリガオ氏が負担する。

V. 漁撈と資本：操業費と分配方法

サマの漁業活動における分配（バハギ *bahagi*）方法は平等が原則である。たとえばシタンカイ・サマとセンポルナ・サマでは集団漁を統率するリーダーには，漁獲を平等に分配できる資質が求められている［長津 1995a：55-56；Sather 1997：127］。爆薬漁とナマコ潜水漁の漁撈組織には種々の違いがみられるものの，もっとも顕著な相違点は以下に記すような分配システムの違いにある。

爆薬漁

乗子と船主は総水揚げ高から操業費（ポオン *poqon*）を差引いた純利益を代分けする。2カ月間操業する爆薬漁には，およそ17万ペソの操業費を必要とする。操業費は乗子と船主が各自の「代」に応じて負担する。代分けには，船，発動機，潜水器がそれぞれ1代として数えられるため，乗子が15人の場合には18代の合計となる。船主は発動機と潜水器の所有者を兼ねることも多く，合計で3代分の報酬を受取ることになる。そのような船主は，漁に参加しなくても，3代を得ることができる。

爆薬漁とナマコ潜水漁の違いのひとつは，乗子が船主から借受ける前借りと操業費の分担金に対して，利子が付加されるか否かにある。爆薬漁の場合には，1回の航海につき30パーセントの利子が課される。ナマコ潜水漁でも乗子は出漁時に分担金を清算することになっている。ところが実際には，分担金が出漁時に支払われることは稀であり，その分は報酬から差引いてもらうことが日常的である。また生活費を前借りすることもふつうにおこなわれている。ナマコ潜水漁の船主が乗子の借金に対して利子を課すことはない。

マンシ島の漁民によると，爆薬漁には1990年頃より，新しいシステムが一般的になったという。サンボアンガの華人が爆薬漁にかかる操業費を積極的に融資するようになったのである。それまでにも船の建造費を華人仲買が貸付けることもあったが，操業費に対して華人が融資をおこなうことは稀であった。

船主は融資に対して利子を払わないかわりに，生産した干魚のすべてを融資元の華人に売らなくてはならない。当然，干魚の価格は融資した華人に有利に設定される。

船主は操業費を工面しなくてもよくなったうえに，操業費の分担金に対する借金には依然として3割の利子を課し続けている。その利子分はすべてが船主の取り分となる。したがって，代分けに依存する乗子の報酬は，純利益が少なくなった分だけ減らざるをえない。つまり，この新しいシステムは船主の経営だけを効果的にするしくみになっており，反対に乗子には不利な労働環境を創出することとなった。

ナマコ潜水漁

ナマコ潜水漁における報酬も純利益を代分けする。しかし，代分けには船，発動機，潜水器のほかに，魚群探知機がそれぞれ1代として数えられる。したがって，乗子が15人の場合には19代の合計となる点で爆薬漁と異なっている。発動機・潜水器・魚群探知機を所有する船主は，4代を受け取る。つまり平均的なナマコ船の場合，船主の取り分は漁獲の2割となる。

潜水器や魚群探知機はマレーシアで購入される。船主のひとりハジ・アチャリ氏は，それぞれ2,600リンギットと1,950リンギットで購入した*22。1カ月間の航海に要する平均的な操業費は，燃料費，食糧費などを含めて，おおむね5万～6万ペソである*23。

爆薬漁の場合と異なるのは，前述したように報酬の前借りと操業費の分担金の返済の遅延に対して，船主が潜水夫に利子の支払いを要求しないことにある。潜水夫が享受する無利子の慣行は，爆薬漁においては3割の利子を支払うのと対照的である。ハジ・アチャリ氏はその理由を「潜水夫はみんな兄弟みたいなもの」だからだと説明する。

しかし，わたしには人手不足という事情の方が大きな要因とも見受けられた。潜水は水深40メートルまで潜るので，危険をともなっている。最近では水揚げ量が不足気味で，漁期ものびる傾向にあるため，潜水夫が集まりにくい事情もある。

人手不足の現実は，潜水夫のほとんどがマンシ島住民の9割を占めるサマではなく，少数派のビサヤであることにも象徴されていよう。スル王国の時代，たしかにビサヤはナマコやシロチョウガイなどを採捕する潜水夫として有名であった［鶴見 1993: 350; Warren 1981: 53］が，サマもまた潜水にたけていた［Kurais 1979: 7, 52; Warren 1981: 72-74］。現在のサマが潜水能力を失ってしまったとは考えにくい。つまりは潜水が危険だから，サマは潜らないだけのことである。

この問題を考えるには，マンシに滞在しているビサヤの社会経済的な背景を考慮しなくてはならない。かれらの多くはミンダナオやビサヤ地方からの移住者である。次にビサヤの潜水夫ジョナサン（仮名）の事例を紹介する。かれは，「潜水夫の仕事は

---

*22　潜水器を用いるには，潜水器から潜水夫に空気を送り込むためのホースも必要である。1巻のホースは100メートルで，価格は130リンギットである。2人が潜水するには少なくとも7巻は必要である。なおバラバク町では魚群探知機と潜水器を用いる場合には，町長の許可が必要で，毎年845ペソを支払うことが義務づけられている。

*23　1カ月の操業のために用意される品々の平均的な量は右の表に示したとおりである。

主な経費だけで4万ペソは必要である。以上の品に加えて、塩、小麦粉、イワシ缶詰、インスタントラーメン、練乳、インスタントコーヒー、玉ねぎ、にんにくなどの野菜と醤油、食酢、調理用油、化学調味料、ケチャップなどの調味料も持参する。練乳はマンシでは口にする機会の少ない贅沢品である。

主な操業費

項目	単価(ペソ)	量	価格(ペソ)
軽油	P2,500	ドラム缶9本	22,500
ガソリン	P1,800	ドラム缶2本	3,600
灯油	P1,300	ドラム缶4本	5,200
水	P30	ドラム缶10本	300
米	P18	500kg	9,000
薪		1～1.5 t	1,000
合計			41,600

危険だ。半身不随になったら，終わりだ」といいながらも潜水夫としての魅力を「お金が突然降ってくるから止められない」という。

事例4

ジョナサンは1955年生まれである。東ネグロス州の州都であるドゥマゲテ（Dumaguete）出身のビサヤの妻との間に6人の子どもがいる。マンシには潜水夫としての仕事があることを聞いて，1990年にやって来た。

ジョナサンはサンボアンガでは，敷網漁船バスニガン（*basnigan*）の機関士として働いていた。1987年には7カ月ほどタウィタウィ州の南ウビアン島付近で，観賞用熱帯魚を捕獲するために，潜水夫として働いたこともある。このときに潜水器の使用法を学んだ。観賞魚の捕獲にはシアン化化合物を用いた。また，1989年にはサンボアンガの真珠養殖会社に雇われてシロチョウガイを採取するために潜った。その後，会社がサンボアンガを撤退したのを機会にマンシへ移住した。1995年にはマンシ島からマレーシアのクダットへ出稼ぎに行った。このときはサラサハタ，メガネモチノウオ，ハタ類，イセエビなどを潜って獲るのが仕事で，シアン化化合物を使用した。クダットでは夜間の潜水漁に従事したこともある。

マレーシアで無許可で労働することと，シアン化化合物を用いて漁をすることが，違法であることをジョナサンも自覚していた。しかし，「生活するためには仕方なかった」と述懐する。ジョナサンがマレーシアからマンシへ戻ってきたのは，不法滞在で逮捕されることを恐れてのことだし，雇い主が不法入国を逆手にとって賃金を約束どおり支払ってくれなかったからである。

南沙諸島海域において危険を冒してまでビサヤが潜水する理由のひとつには，潜ること以外に生活の糧を求める手段がないという現実がある。そうでなければ，マレーシアやフィリピンのほかの地域でも潜水器を用いたナマコ漁が展開されてもいいはずである。そのような例がみられないのは，危険をともなう潜水夫の志願者が少ないからではなかろうか。

したがって，ナマコ漁においては操業費の分担金遅滞にも生活費の前借りにも，利子が課されないことも理解できよう。そして，このことは形式上は船主と潜水夫が独立した経営主体として存在し，捕獲されたナマコを船主が潜水夫から買取ることとも無関係ではないはずである。次にビサヤ潜水夫，ダリオ（48歳，仮名）の事例を紹介する。

事例5

ダリオはマンシに来て4年になる。その前はマレーシアのバンギ島（「（国境の）向こう側」*sa kabilaq* と表現）の日系真珠養殖会社で潜水夫として働いていた。彼は1997年7月3日に約1カ月間のナマコ潜水漁から帰島した。発動機の調子が悪かったため，漁場をうまく移動できず，期待したほどの水揚げがなかった。潜水夫10人で800個のドゥルアンしか獲れず，1人分の代分けは3,400ペソにすぎなかった。その結果，船主に8,000ペソの借金をつくってしまった。

ダリオによると，潜水夫は船主との間で恒常的な契約関係にあるのではない。複数の船主のなかから，もっとも良い条件の船

主を選択することができる。今回こしらえた借金は，次の航海の報酬から支払えばよい。そのさいに，別の船主の仕立てた漁船に乗り込むことも不可能ではない。ここに潜水夫と船主とが労働条件において拮抗した関係を保っていることが指摘できよう。

むすびにかえて

以上，マンシ島の漁業活動について，爆薬漁と潜水漁のふたつの中規模漁業を中心に，その加工品の流れについて報告した。第II章で報告したようにマンシ島では，小規模漁業は補助的な漁業としての意味しか持っておらず，漁法の展開も限られている。換言すれば，マンシ島で展開されているサマの漁業活動は，長津らが分析してきたスル諸島南部に居住するサマにみられるものとは基本的に異なる性格をもつものと考えられる。この差異が生じた理由の考察は，今後の研究で明らかにしていきたい。現段階では，もともとウグス・サマがタウィタウィ州の母村においても小規模漁業に積極的ではなかった可能性だけを指摘しておきたい。

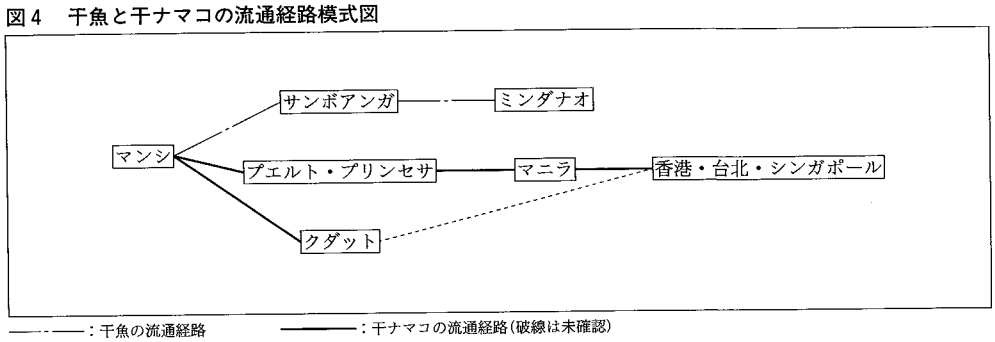
1960年代半ばまで，ウグス・サマはインドネシアやマレーシアと積極的に交易をおこなっていた。たとえばスラウェシ島北部に産するココヤシの実は肉厚で高品質だったため，コプラを買付け，ホロやサンボアンガで転売した。コプラを金ないしは小麦粉と交換する場合もあったが，現金で取引きすることが多かった。この交易は10人ほどの乗組員が共同でおこなっていた。報酬の分配は，人数に発動機と船の２代を加えた代分けであった。ウグス・マタタ村では，小規模漁業よりも組織的な航海が盛んであり，中規模漁業に求められる共同性・組織性はウグス・サマに培われていたものであると考えられよう。さらに資本の問題もある。自主交易で蓄積した資本を中規模漁業の操業資金へ転用することも容易だったはずである。このあたりの事情は，タウィタ

表３　爆薬漁と潜水漁の比較

	爆薬漁	潜水漁
開始時期	1960年代後半	不明
乗組員数	13～15人	
船主	ウグス・サマ	
乗子	ウグス・サマ	ビサヤ（＋ウグス・サマ）
操業期間	2カ月	1カ月
操業費	17万ペソ	５万ペソ
潜水器の使用開始	1990年代半ば	1970年代後半
魚群探知機の使用開始	無	1990年代半ば
分配方法	代分け	
分配の時期	干魚を仲買人に販売した後	マンシに帰島した時点
船主の取代	３（船・発動機・潜水器）	４（船・発動機・潜水器・魚群探知機）
前借・借金への利子	有（3割）	無
出荷先	サンボアンガ	プエルト・プリンセサ、クダット
スキ関係	有	無
製品の価格変動	有	無
製品の需要	ミンダナオ地域	国外

出所：筆者作成

図4　干魚と干ナマコの流通経路模式図



ウィ地域における経済活動の歴史的な推移と絡めて，今後の調査課題としたい。

そのうえで爆薬漁と潜水漁のふたつの中規模漁業にみられる特色を整理したい。前頁の表3はふたつの漁法の特徴をまとめたものだが，同じ商業的な漁業活動であっても市場との関係や利益分配の詳細などの点ではかなりの相違も認められる。以下両漁法の特色を整理しながら，今後の課題をまとめておく。

漁期は爆薬漁の操業が2カ月におよぶのに対して，ナマコ潜水漁はその半分の1カ月間である。また，爆薬漁ではサマだけが乗子であるのに対して，ナマコ潜水漁ではビサヤが潜水夫として雇われている。爆薬漁で獲れた魚はすべてが干魚に加工され，そのほとんどがサンボアンガ市場を経て，ミンダナオの各地に流通し消費される。一方，プエルト・プリンセサへ集められた干ナマコは，ほとんどがマニラへ出荷される。それらは主に香港やシンガポール，台湾などへ出荷され，中華料理用の高級食材として消費される。小規模漁業で目的とされるアワビや活魚も干ナマコと同様に高級食材である。いずれも干魚とは対照的に，地域外の経済圏へ出荷される性質を持っている。

ここでサンボアンガを集散地とする干魚の流通網を「ミンダナオ地域経済圏」とひとまず仮定しよう。するとマンシの漁業活動はミンダナオ地域経済圏で消費される干魚と，それ以外の干ナマコが流通する広域経済圏のふたつの異なった経済圏につながっていることになる（図4参照）。

報酬の分配方法と労務組織にみられる相違にも注意しなくてはならない。基本はどちらも代分けであるが，爆薬漁には華人資本が参加していることと，操業費の分担金に利子が課される点で異なっている。今後は爆薬漁と潜水漁の分配システムについて両者にみられる相違を比較検討していかなくてはならないが，そのまえにこの方面の研究に蓄積があるビサヤ海域でおこなわれている漁業活動における分配方法と比較してみたい。

ビサヤ海域の分配方法とマンシとでは次の2点が異なっている。①ビサヤ海域では船主が操業費を負担することと，②操業時に報酬とは別に現物が支給されることである。ビサヤ海域における漁業活動では，操業費は船主個人が全額負担する。マンシ島の場合には，操業費は船主も乗子も平等に負担し合う。そのためにマンシでは，船主への借財を抱える乗子も多い。

第2点目に関しては，ビサヤ海域では操

業のつどに乗子に対して漁獲に応じた鮮魚が現物支給される慣行があるが，マンシの場合には鮮魚や干魚が現物支給されることはない。船主・乗子の労務関係を考えるうえでは，現物支給の慣行を無視することはできないだろう。支給された現物の一部は家庭で消費されたり，船主に買取られて現金化することが可能だからである。ビサヤ海域のバンタヤン島の事例においては，報酬の勘定が月１回しかおこなわれないうえにその額も十分とはいえないことから，操業ごとの現物支給の慣行を漁夫の生活を最低限保障するしくみと牛島［1993：55］は解釈している。

生活保障という視点からマンシの爆薬漁を考えてみた場合，華人の資本参加は注目されるべき問題である。華人による融資が船主に有利に働き，乗子には不利な状況を生み出していることは前述したとおりである。サマの分配原理は平等である［長津 1995a：55-56；Sather 1997：127］ので，ナマコ漁や爆薬漁における代分けと操業費の平等分担は，サマらしさが具現化された慣行だといえる。さらに平等主義を敷衍すると，爆薬漁における有利子制度も船主ばかりに負担がかかることを回避する配慮であるとも解釈できる。

しかし，操業費が過度に高騰するにつれて，パナイ島のエスタンシャのように利潤追求に傾いた船主が乗子に対する責任を減少させることも起りうる。第二次世界大戦後のエスタンシャでは，船主が利潤を追求するあまりに，生活保障として機能してきた相互依存関係が崩壊してしまった［Szanton 1971：90-91］。このことは，マンシの爆薬漁においても華人の資本参入によって，サマ社会にみられた相互依存関係が変容していく可能性を示唆していよう。現段階ではウグス・サマ社会における船主・乗子の労務関係を論じるには不十分な資料しか持ちえていないため，この問題は別の機会に論じざるをえない。

漁業活動は，漁獲現場の記述に加えて，漁獲物の加工・流通・消費までの工程を視野に入れた水産業全体のなかでとらえられるべきだ，とわたしは考えている。なぜならば，マンシのサマの場合には，干魚にしろ，干ナマコにしろマンシで消費されることはほとんどないからだ。マンシ・サマが捕獲・加工した乾物はどのように流通していくのか。この点において残念ながら，従来のサマ研究には蓄積がほとんどない。たしかに特殊海産物においては，その消費地である華人市場を意識した研究の必要性が主張されている［鶴見 1993；秋道 1995：233；村井 1998：153］。しかし，干魚の流通に関しては卸売り・小売りについての詳細な研究が存在しないどころか，その重要性さえも認識されてこなかったといってよい。さらに干魚を消費する人々の生活についての考察は，漁撈研究の視野の外に置かれてきた。

南沙諸島と爆薬漁というセンセーショナルな話題性にとらわれずに，むしろ，サマ漁民がその漁場と漁法を選択するようになった社会経済的背景や，その漁場・漁法で得られた魚を消費しているのは誰なのか，それらの流通を握っているのは誰なのかを明らかにする必要があろう。マンシ島のサマが爆薬を用いて捕獲した魚が，ミンダナオ島の内陸部で消費されている。図式化すると単純な線でしか表現しえないが，その

背景にはこれまで指摘してきたような種々の問題が絡んでいる。今後はミンダナオ地域経済圏の現状とその歴史的展開に的を絞って研究していきたい。そのことによって，サマが特殊海産物の採取だけに従事する「辺境の民」ではなく，ミンダナオの開発史のある側面を支えきた人々であることが明らかになるであろう。

南沙諸島は，国際関係問題で争点となっている場でもあるし，爆薬漁はサンゴ礁を破壊する漁法である。しかし，漁民として魚が多い豊かな漁場を開発することは当たり前であるし，かれらにとって効果的と思われる漁法を選択することもまた当たり前の行為である。より豊かなサメ資源をもとめて，スラウェシのサマや東部インドネシアの漁民がオーストラリア領海まで越境する事例［鈴木 1994；秋道・田和 1998］は，よく知られている。漁業活動における「越境」の問題は，「海の資源は誰のものなのか」という問題と無関係ではありえない。「海洋資源管理と効率のよい漁法」の関係というマクロな視点をも視野に入れて，今後はサマの漁業活動の考察を深めていきたい。

謝辞

本報告を作成するにあたっては，中京大学の川田牧人氏，国立民族学博物館の秋道智彌氏，池谷和信氏，白川千尋氏，京都大学東南アジア研究センターの長津一史氏にご教示いただいた。バラバク町においては，ハジ・アミルハムジャ氏とカンスル氏に調査の便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝したい。

参考文献

Akamine Jun
1997 Notes on Sinama Languages: Phonology, Orthography and Wordlist. *The Journal of Sophia Asian Studies* 15: 3-39.

秋道智彌
1994 「海の資源はだれのものか」大塚柳太郎編『資源への文化適応――自然と共存のエコロジー』（講座 地球に生きる3）雄山閣，219-242。
1995 『海洋民族学――海のナチュラリストたち』東京大学出版会。
1997 「共有資源をめぐる相克と打開」福井勝義編『環境の人類誌』（岩波講座 文化人類学2）岩波書店，165-187。

Akimichi, Tomoya and Dedi A. Supriadi
1996 Marine Resource Use in the Bajo of North Sulawesi and Maluku, Indonesia. *Senri Ethnological Studies* 42: 105-119.

秋道智彌・田和正孝
1998 『海人たちの自然誌：アジア・太平洋における海の資源利用』関西学院大学出版会。

BSAC JAPAN
1987 『ノービスダイバーマニュアルI・II』マイカルマリン。

Blanchetti-Revelli, Lanfranco
1993 Masigpit and Mamuno: War, Resettlement and Ethnic Dynamics in the Formation of Some Samal Migrant Communities in Balabac. *Pilipinas* 21: 29-50.

Buchholz, Hanns J.
1987 *Law of the Sea Zones in the Pacific Ocean.* Hamburg: Institute of Asian Affairs, and Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Cannon, L. R. G. and H. Silver
1994 North Australian Sea Cucumbers. CD-Rom edn. Expert-center for Taxonomic Identification, University of Amsterdam.
Cuyos, N. A. and A. Spoehr
1976 The Fish Supply of Cebu City: A Study of Two Wholesale Markets. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 4: 160-198.
Gosliner, Terrence M., David W. Behrens, and Gary C. Williams
1996 *Coral Reef Animals of the Indo-Pacific*. Monterey, California: Sea Challengers.
Guille, Alain (ed.)
1986 *Guide des Etoiles de Mer, Oursins et Autres Echinodermes du Lagon de Nouvelle Caledonie*. Paris: Institut Francais de Recherche Scientifique pour le Developpment en Cooperation.
池端雪浦・生田　滋
1977 『東南アジア現代史II』（世界現代史6）山川出版社。
岩切成郎
1992 「海産物」石井米雄監修『フィリピンの事典』同朋舎。
Kiefer, Thomas M.
1972 The Tausug Polity and the Sultanate of Sulu: A Segmentary State in the Southern Philippines. *Sulu Studies* 1: 19-64.
Kurais, Muhammad II
1979 The History of Tawi-Tawi and its People. Bongao: Mindanao State University.
Macknight, C. Charles
1976 *The Voyage to Marege': Macassan Trepangers in Northern Australia*. Carlton, Victoria: Melbourne University Press.
村井吉敬
1998 『サシとアジアと海世界』コモンズ。
長津一史
1995a 「フィリピン・サマの漁撈活動と環境観――民俗環境論的視点から」修士論文　京都大学。
1995b 「海の民サマ人の生計戦略」『季刊 民族学』74: 18-31。
1997 「海の民サマ人の生活と空間認識――サンゴ礁空間 *t'bba* の位置づけを中心にして」『東南アジア研究』35: 261-300。
Nimmo, Arlo H.
1968 Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16: 32-59.
1986 Recent Population Movements in the Sulu Archipelago: Implications to Sama Culture History. *Archipel* 32: 25-38.
大野　俊
1997 『観光コースでないフィリピン：歴史と現在・日本との関係史』高文研。
大島　廣
1962 『ナマコとウニ』内田老鶴圃。
Sather, Clifford
1984 Sea and Shore People: Ethnicity and Ethnic Interaction in Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 3: 3-27.
1985 Boat Crews and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labour among the Bajau Laut of Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 4: 165-214.
1997 *The Bajau Laut: Adaptation, History, and Fate in a Maritime Fishing Society of South-Eastern Sabah*. South-East Asian Social Science Monographs. Oxford: Oxford University Press.
Sopher, David
1965 *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of the Southeast Asia*. Singapore: National Museum Singapore. Reprinted in 1977 with postscript.
South Pacific Commission

1979 *Beche-de-Mer of the Tropical Pacific : A Handbook for Fishermen*. Handbook no. 18. Revised ed. Noumea : South Pacific Commission.

Spoehr, Alexander

1980 *Protein from the Sea : Technological Change in Philippine Capture Fisheries*. Ethnology Monographs 3. Pittsburgh : Department of Anthropology, University of Pittsburgh.

Stone, Richard L.

1962 Intergroup Relations among the Taosug, Samal and Badjaw of Sulu. *Philippine Sociological Review* 10 : 107-133.

鈴木隆史

1994 『フカヒレも空を飛ぶ』梨の木舎。

Szanton, David L.

1971 *Estancia in Transition : Economic Growth in a Rural Philippine Community*. IPC Papers 9. Quezon City : Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University Press.

床呂郁哉

1996 「越境の民族誌――スール一海域世界から」山下晋司編『移動の民族誌』（岩波講座 文化人類学7）岩波書店，159-186。

鶴見良行

1984 『マングローブの沼地で――東南アジア島嶼文化論への誘い』朝日新聞社。

1986 「フィリピンの難民――ミンダナオ内戦を中心として」国連大学・創価大学アジア研究所共編『難民問題の学際的研究――アジアにおける歴史的背景の分析とその対策』お茶の水書房，63-93。

1987 『海道の社会史――東南アジア多島海の人びと』朝日新聞社。

1993 『ナマコの眼』ちくま学芸文庫。

浦野起央

1997 『南海諸島国際紛争史』刀水書房。

牛島　巌

1990 「スキ（得意客）関係覚書――フィリピン・ビサヤ内海域の市場流通網」『族』14 : 1-17。

1992 「コブコブ（旋網漁業）複合――セブ・バンタイアン町スバ港町」『族』18 : 1-43。

1993 「ビサヤ海・バンタイアン島の漁業と収益分配方式」『族』22 : 49-90。

Ward, R. Gerard

1972 The Pacific Beche-de-Mer Trade with Special Reference to Fiji. In R. G. Ward ed. *Man in the Pacific Islands : Essays on Geographical Change in the Pacific Islands*. Oxford : Oxford University Press. pp. 91-123.

Warren, James F.

1981 *The Sulu Zone : The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore : Singapore University Press (Reprinted by New Day Publishers, Quezon City, 1985).